

JOCSの奨学金が求められています

近年、JOCSでは奨学金事業の支援額が増えています。より多くのニーズに応えるために採用者を増やしていることに加え、奨学生1人あたりの学費が高額化しているためです。

以前は、准看護師が看護師になるといった基礎的な学びを支えることが多かったJOCSの奨学金事業ですが、近年は、現地のニーズに合わせ、専門医の資格取得や、指導者や責任者になるための看護学修士の学位取得など、より高度な学びを支えることが増えています。

奨学金事業をはじめとする活動を通して、JOCSは、困難の中にある人々の健康といのちをまもることを目指しています。皆様のご支援をお願い申し上げます。



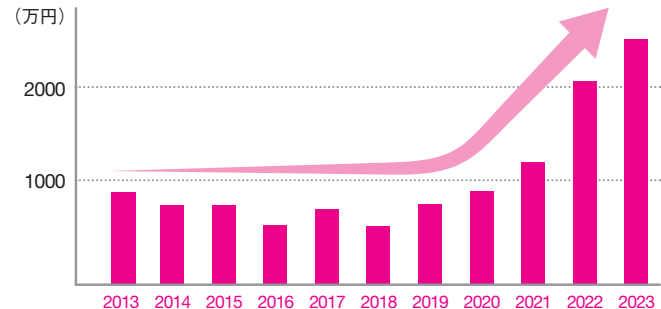
パピータ・ライさん
(ネパール・オカルドゥンガ病院)

私はJOCSの奨学金を受け、看護学修士の学位取得を目指しています。

オカルドゥンガ病院は首都カトマンズから220キロ離れた山間部にあります。都市部から遠く利便性に恵まれないため、医療従事者の確保に苦労しています。一方で、適切な医療を受けられる地域唯一の病院として周辺住民に信頼され、7~8時間歩いて病院にくる人もいます。

私はオカルドゥンガ病院で生まれ、この地域で育ちました。2009年から看護師として働いています。2019年、前任者の退職に伴い看護部長職に就きました。当時、病院には

奨学金事業の支援額



2020年までは年間1000万円前後で推移していましたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受けた2021年以降は、奨学金事業を拡大させました。

地域のニーズに応える形で増床する計画があり、そのため修士号をもつ看護部長が必要でした。地元で生まれ育った自分がその資格をとることで、これからもずっと病院と地域住民に仕えることができると思い、JOCSの奨学金を申請しました。

奨学生は医療専門職としての資格や技術を身に付け、地元に戻って活動しています。彼らが日々向き合うのは、医療事情の厳しい地域に暮らす病気の人々、障がいのある子どもたち、出産する母親たちです。決して名声を博すわけではありません。しかし、暗い物語に覆われる世界の中であって、静かに輝き続ける世の光だと思います。



柳澤理子

JOCS奨学金委員会委員長。JOCS理事、愛知県立大学看護学部教授、元JOCSカンボジア派遣ワーカー。